

風のように

甘木教会

主任牧師：白川道生

牧会委嘱牧師：竹田孝一



主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない。ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。 イザヤ書2:4～5

（イエスは）言われた。「向こうの村へ行きなさい。するとすぐ、ろばがつかないであり、一緒に子ろばのいるのが見つかる。それをほどいて、わたしのところに引いて来なさい。もし、だれかが何か言ったら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。すぐ渡してくれる。」 マタイによる福音書21:2～21:3

【説教要旨】

2019年の説教に佐藤優さんの世界の分析を引用しました。「世界が、弱肉強食の帝国主義的傾向を強めていることを冷静に認識しましょう。繰り返しになりますが、帝国主義国はまず相手国のことなど考えずに、自国の利益を一方的に主張します」という現代世界に対して、世界は相互に結ばれており、共通の未来のために、それぞれが排他的利益を後回しにすることが求められているという趣旨を語られ、「**今、拡大しつつある相互不信の流れを壊さなくてはなりません。**」と語りかけました。トランプ大統領が選ばれ、まさにアメリカ第一主義の帝国主義が世界を支配する現実は、佐藤さんの分析通りです。その中で世界が、私たちはあえぎ苦しんでいます。そして、将来に不安を覚えています。

今日から待降節が始まりクリスマスを迎えます。

第1聖書日課は、イザヤ書が読まれました。イスラエルの国が大国アッシリアとエジプトの侵略を受ける危機の中にあった時代にイザヤが生き、神さまの言葉を語り、人々が神にき、神

さまの言葉を取り次ぎ、人々に神に帰ることを語り、求めました。「この国は銀と金とに満たされ／財宝には限りがない。この国は軍馬に満たされ／戦車には限りがない。2:7」。

2章は、軍備、経済力に頼る人間の傲慢さを指摘しています。現代社会もまたこのような世界です。それに対しては、「**軍備拡張競争は貴重な資源の無駄遣いです**」とフランチェスカ教皇は指摘しています。軍備拡張と経済力は決して人間を平和に導きません。「人間に頼るのをやめよ／鼻で息をしているだけの者に。どこに彼の値打ちがあるのか。2:22」とイザヤは預言します。

神が求められる王が必要とされているのは、軍馬でなく、ろばです。「(イエスは)言われた。「向こうの村へ行きなさい。するとすぐ、ろばが見つからないであり、一緒に子ろばのいるのが見つかる。それをほどいて、わたしのところに引いて来なさい。もし、だれかが何か言ったら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。」ろばは、日常の日々の生活で使われ、私たちが必要とするものです。軍馬は必要としないとイエスさまは、はっきりと言われます。

主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない。

この世界こそ、神が起こされる世界だということです。

「核兵器のない世界が可能であり必要だという確信をもち、政治を司る指導者の皆さんにお願いします。核兵器は、安全保障への脅威から私たちを守ってくれるものではない、そう心に刻んでください」とフランチェスカ教皇は呼びかけます。これこそ、神のみ心です。私たちを守るものは強力な経済、武器、核兵器だと思っている私たちに「人間に頼るのをやめよ／鼻で息をしているだけの者に。どこに彼の値打ちがあるのか。2:22」とイザヤは、私たちに神のみ言葉をもって迫って来します。

「人間至上主義」、「食うか食われるか」という現代の社会にあって、聖書の言葉は何の力もない空しいもののように思えま

す。

自分の国が大国アッシリアとエジプトの侵略を受けようとするとき、イザヤの言葉も空しく響くのかも知れません。しかし、たとえ空しく響いても神の現実、主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばないという出来事が起こるのです。

イザヤは現実の厳しさの中にあっても、「ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。2:5」と呼びかけます。

そして、パウロは、「夜は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着けましょう。ローマ13:12」と言います。主の光の歩み、光の武具を身に付ける者こそ私たちであり、「国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない。」者です。こう私たちは宣教の言葉を伝えたいのです。「原爆と核実験とあらゆる紛争のすべての犠牲者の名によって、声を合わせて叫びましょう。戦争はもういない。兵器と轟音はもういない。こんな苦しみはもういない。破壊があふれた場所に、今とは違う歴史を描き実現する希望があふれますように。」

「ホサナ。」、元来の意味である「どうか救ってください」という現実があり、切なる願いが、今を生きる私たちにあります。

しかし、主を迎えることにこそ平和があり、喜びがあると同時に主が私たちの所に来てくださり、平和を、喜びを与えてくださいます弱肉強食の帝国主義的傾向を強めている不安定な、希望の持てない世界であっても、たとえそうではないという現実があります。教皇が呼びかけたように「どうかあなたが来て、破壊があふれた場所に、今とは違う歴史を描き実現する希望があふれますように。」と「ホサナ。」、どうか救ってくださいと祈り続けましょう。

牧師室の小窓からのぞいてみると



新聞離れが、顕著である。九州に来て新聞屋さんを探すことも出来ず、新聞を定期購入していない。それで、何か生活で困ったことが起きているかということとはない。ニュースはインターネット、テレビで聞くことが出来る。しかし、何かを失っているように感じる。基本はやはり2紙以上の新聞を読み、情報を得ることではないだろうか。

インターネットは特にどこか胡散臭く感じるのは私だけであろうか。しかし、時代は大きく変化している。インターネットなどのニュースを自分がどう受けとめ、判断していくかには、正しく判断する自分の哲学が必要になると思う。一番、怖いのはフェイクニュースに踊らされて判断を間違っていくということである。フェイクニュースが政治にまで、徐々に及んでいっているのが今の時代である。怖い時代がやって来るかもしれない。「気をつけて、目を覚ましていなさい。マルコ13:33」というイエスさまの言葉がますます大切な時代になっている。

園長・瞑想？迷走記



VOLANTILE(不安定)、UNCERTAIN(不確実)、

COMPLEX(複雑)、AMBIGUOUS(曖昧)という「VUCA

の霧」問題を子どもたちは負っている。予測不可能な時代を生きていくのである。同時にウェブ社会は、知識の得る方法、コミュニケーションの取り方が今まで経験もしたことのないようなところを生きていく。この変化していく初期の社会は、大人も大変だが、子どもたちにとって大変な重荷とじわじわと感じているのではないだろうか。

「VUCAの霧」の中を生きぬく子どもたちにとって、何が大切なのだろうか。子どもたちに成功者となることを求める社会にあって、私は、子どもが幸せと感じる成幸者であって欲しい。何よりも子どもが幸せを感じれるようになるのは、どうすればよいかということを保育の内容を深めることがますます子どもの保育にあたる保育が求められる今にあるのではないだろうかと思っている。

毎日の糧

聖書：主の家に行こう、と人々が言ったとき、

わたしはうれしかった。

詩編 122：1



ルターの言葉から

信仰からは、神に対する愛と望みがあふれ、愛からは、隣人に対して惜しみなく奉仕する喜びに満ちた自由な生活があらわれます。
「キリスト者の自由」より

巡礼

122篇は、エルサレム巡礼の詩編である。エルサレム巡礼は、家族、親族、地域単位で行われていた。日本でも、「お伊勢参り」、「大山参り」などがある。

エルサレムに向かう巡礼者が、そのとき口ずさんだ詩編である。構成の特徴からみても分かるように巡礼歌としては大変に整えられている。

確かにこの詩篇はエルサレム神殿への巡礼の詩であり、エルサレム平和が、イスラエル民族の平和をもたらすと詠う。しかし、これを今日的に解釈するとき、エルサレム神殿、神がおられるところ、ここに平和がもたらされるということではないだろうか。私たちの巡礼は、私たち個人が神と出合い、個人が平和を得るための旅からはじまるかもしれない。

しかし、巡礼の道の一步一步は、個人の神との出合いでなく、「主の家に行こう、と人々が言ったとき、わたしはうれしかった。」と歌うように自分の喜びでなく隣人の喜びとなるということではないだろうか。同時に個人の平和（平安）だけでなく、「わたしは言おう、わたしの兄弟、友のために。

『あなたのうちに平和があるように。』」と詠うように隣人の平和を祈り、願うところまで昇華されていくのではないだろうか。巡礼は人を優しくしていく。

祈り：主よ、あなたへ向かう巡礼の旅へとお誘いください。

甘本通信

ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。

ルカによる福音書 19章5節



人生で愉しかったという時があり、それが今の自分の人生を支えてくれているという時があるのではないだろうか。ネフローゼ腎炎で入退院を繰り返していた私が、神学校に入学して病気が消えた。体が健康体になった。この18歳から24歳までの神学校の6年間は私は最も楽しい時であった。よく遊び、よく学び、よく働いた。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。」という友が読んでくれる出会いもあった。

甘本教会の出身の牧師、中尾牧師の甥の譲君との出会いがあった。現在は薬院で病院医院長している。彼から硬球式テニスを教えてもらった。世の中にこんな楽しいものがあるんだと暇があればテニスをしていた。また、彼は早稲田の工学部であるが、本棚には文化人類学の本、柳田國夫、石田英一郎、文学では、ドフトエスキー、夏目漱石、志賀直哉・・・という本があった。この本は彼の話では修猷館高校時代にアルバイトして、購入したという。私は神学校時代にアルバイトをしまくって、彼が私を神田の古本街につれていってくれた夢のような世界で、神学書、他の本を買っていた。私の様な田舎者と付き合ってくれた。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひ、あなたの家に泊まりたい。」というイエスの優しさを彼を通していただいた。彼との交わりを通して、イエスさまの優しさが、私の心の全体を完全につつまこんでくれた。よく遊び、よく学び、よく働いた。

(甘本日記)土) 聖和ミニバザー、教会員、松崎保育園の職員が揃い、ひねもすのたりのたりかなというゆっくりとしたバザー。感謝。日) バザーの後だが、礼拝を守る。インドネシアの青年も来る。役員会。月) 休日。火) 休み明けの幼稚園。礼拝から始まる。水) 病気の6カ月定期健診。幼稚園に帰り、職員会議、羽村の事務会議 zoom 参加、AI を使って、「園だより」をタガログ語、英語にすると20時。木) インフルエンザの脅威で保育園に行かれず、幼稚園で春花壇の手入れ、事務作業。結局、最後まで。金) ページェントの練習。クリスマスは近い。

おまけ・牧師のぐち（続日記）牧師だって神さまの前でぐちります。

ぐちらない聖人（牧師）もいます。

土）天気恵まれて、「聖和ミニバザー」、息子が大阪から手伝いに来てくれる。また教会員のお嬢さんも東京から。教会員、松崎保育園の職員が揃い、癒される時がゆっくりと過ぎていく。休園中の聖和幼稚園だが、園を開き、空気を通していくことが地区への貢献。夜、泊。日）熱も出ずに体調も回復。いつものように園庭を掃きながら瞑想。行く道を教えたまえ。礼拝前に、リーメンシュナイダーの絵葉

（夏一日日草、秋一菊 冬一フキの花が一緒） ➡

書を見つけ、説教に急遽、リーメンシュナイダーのことを話す。クリスマス準備。役員会。信徒さんに送られて帰宅。助かった。月）休日。教会、幼稚園のことをせずに家内と博多に蕎麦と私の服を買いに行く。行きたい蕎麦屋は休みで残念。クリスマスバージョンに街は変化。孫の誕生祝いを見つけ、少ない残された夫婦二人の時間を過ごす。火）休み明けの幼稚園、わざわざ休みの大和牧師が来てくださり礼拝をしてくださる。実力といい、先生思うが。水）朝は、病気の6カ造影剤を入れてのCT検査。手が上手くいくことはないが、「します」と言って、ゆっくを刺す。検査後の針を抜くんですね。彼女でしか出来嘘のように回復している。員会議、羽村の事務会議に「園だより」をタガログ語



AIは凄い。議事録もAIを使えば作ってくれ、まとめてくれると聞く。しかし、職員会議議事録は大和牧師がアナログで、羽村の事務会議議事録は私が作成、すぐに出席者に送る。注射もAIを使ったロボットが正確に血管に入れてくれる時代が来ていると思う。AIと向かい合う時代が来ている。木）インフルエンザの脅威で保育園に行けず、幼稚園で春花壇の手入れ、花の苗の移植、菜の花、蓮華の種蒔く。精神的癒しの（鎮守の住吉神社の大イチョウ）時である。金）ページェントの練習。クリスマスは近い。